

鯨 研 通 信

第 313 号

1978年 2月

財団法人 日本捕鯨協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



鯨史巷談(5)

勝山鯨碑発見余話

黒潮資料館 矢代嘉春

錯覚

巷談今号は内房勝山の鯨碑群発見裏話と参ろう。

さて錯覚の砂上に堂々たる高樓を完成させたのが捕鯨文化史。今迄四回に亘るこの巷談はその土台にレントゲンをあてたものだ。今号又然り。どうしてこんなわかり切ったことに長い事気がつかなかったのか？いや人様にではない。私自身に怒っているのだ。そのために長い間貴重な時間と体力を浪費してしまった。

まぼろしの鯨墓

事と次第はこうだ。私も御多間に洩れず醍醐組の鯨墓さがしに血道をあげていた。あのせまい勝山の町と浜を歩きつづけた。今になって考えればバカバカしい話だが醍醐家の初期の墓碑のあるあの高い堂山の木の根もわけた。然しどこにもない。

浜にはあったらしいが長年の荒天や津波で流されてしまったというのがお定りであのせまい浜のこと信ぜざるを得ない。

つまる処は善だ寺妙典寺にもどるしかなく墓碑名や位牌文書等を再調査するのだからその昔何代目かの醍醐夫人か胎鯨をあわれみどこか墓地の一隅に葬ったという伝承を聞かされるのみで誠に心許ない。

もうこれではお手あげで結局は通説通り醍醐組にははじめから鯨に対し慰霊する慣習はなかったのだろうと考えざるを得ない。こうして史料探求には相当うるさい私もあきらめかかった処え三重の中田四朗前教授から熊野浦の阿曾浦から「房洲被履巷侯加子覚」なる延宝六年午十月の運上延納願書が発見されたという連絡あり写真まで同封された。成程五人の水主が房洲へ出稼ぎに来ている。

この新資料で消えかかっていた探求欲が再び目をさました。醍醐組は今日や昨日の新業者ではない。慶長次来明治中期まで三百数十年もつづいた名門であり然も徳川中期から捕鯨部門停止の明治三年迄の捕獲頭数もキチンと記録されている。

然も日本一の捕鯨地地からは鯨唄漁撈作法専門用語に到るまで色こく伝承されている。それなのに鯨墓建立の慣習だけが伝承されぬとはどう考えても納得がゆかない。

そこで私はもう一度醍醐組の歴史を洗い直して見ることにした。先学の学跡を盲信したばかりに何度も大きなあやまちを冒してしまった。白紙にかえって読みかえして見ねばならぬ。

あれこれ探求して行くうちにその組織に関西組とは大きな違いのある事がクローズアップされて来た。それは三ヶ条に要約出来る。

その第一は関西組は直接鯨を獲るが醍醐組は意外や意外捕鯨には全く関係せず、旗頭と名づける三組の下請船元にまかせっぱなしで船も鉤もロープも何一つ持たない。ただロープの原料麻と飯米一人一日五合を給するだけである。

第二の相違点は元籍(醍醐組のことを言う)は鯨体の全部を引き取るのでなく脂皮と骨だけであり、肉の方は三分の二を船方に還元し三分の一を陸上作業者達や自家用に配分する。肉を最大の商品とする関西組とは全く対象的である。

つまり醍醐組は鯨油業者とでも言える業態で船元との関係は現在の企業と下請業者と考えれば理解が早い。

第三のそれは鯨体の解剖はこれ又出刃組という下請業者に一切を委任し全く関知しないという点だ。これ又関西組では考えられぬ形態である。

こう問題を分析して行くと鯨墓不在の謎がどうやら此の辺にある事が浮び上ってくる。

和田の解体場にて

此の様な或る日外房和田浦の捕鯨解体場へ8ミリ撮映に出かけた。折よく一頭があがり解体が始まった処である。

解剖夫がナギナタ様の解剖刀をふるいさーッと切り口をつける。ウインチがその端をひっかけてはいで行く。それをば何人も解剖夫が30センチ位に切り分け、そばのトラックにどンドンほうりあげる。ボイラー室へ行くのだ。

赤肉はこれ又鯨の様に片身づつ教割されて一抱え程の肉塊に切られ氷蔵溜にほうり込まれ、まぢかまえてある小売商や加工業者に渡される。最後の大骨は関節から簡単に切られ臓物と一緒にこれもボイラー室へ。

こうして一時間そこそこで全部が処理されてしまい広い解剖床には何一つのこらずあととはどンドン水で洗浄されきれいさっぱりである。成程鯨にはすてる処が何一つないとはよく言ったものと感に堪えていたのだが、この時ふっと頭をよこ切ったことがある。そうだ鯨には葬るべき何物も無い。無い以上墓があるわけがない。ありとすれば胎鯨のそれであって、成体の墓というのは供養碑か慰霊碑に類するものであろう。

例え流れ鯨であっても新らしいものなら肉をとるだけ、古いものはそのまま腐るにまかせるより他あのデカイ鯨体はどうしようもあるまい。

従って全国に散在する鯨墓乃至鯨塚なるものは決して鯨そのものを葬ったものでなく鯨骨の一部を葬るか或いは御本尊として俗信の対象としたものに違いあるまい。これまた一般動物の墓と同一視する錯覚に我々はおち入っていた。鯨に関する限り碑と墓を混同してはならない

出刃組を尋ねる

こうして問題を煮つめて行くと否応なく出刃組にたどりつく。彼等は世襲の解体下請業者であり、関西組には全く見られぬ組織である。

関西網代の鯨体解剖はそれこそ捕鯨絵巻のクライマックスで鯨史稿でも勇魚取絵詞でも紀洲絵巻でもすべて軌を同じうする。この為に広大な作業場や工場が存在するのだ。

処が意外にも醍醐組には此の華々しい見せばはない。丸のままを12人の農民で結成された出刃組に引き渡してしまうのである。

彼等は平素は一山こえた南佐久間村というちいさな農村部落で農業に従事する小グループである。

鯨があがると出刃をかついで浜にかけつけ、元締に計測を示し、それから清水浜という陸からは行けぬ断崖下の猫の額程の砂浜で解体にかかる。これは見物衆や作業員達に肉を同心奪されるのを防ぐ為の措置で、都合のいい事には鯨が中型の槌鯨(8m約8トン)であるから、どうやら彼等だけで動かせるから此の浜でやれるのである。これが関西の主目標たる座頭やせみ(20m40トン)では手も足も出ない。

これをもう一つ突っ込んで見れば鯨体の大小が同じ捕鯨業者でもこの様に似て非なる経営形態を生み出したのであり、此の点を同一視した為に捕鯨史に大きな錯覚が生れてしまったのである。

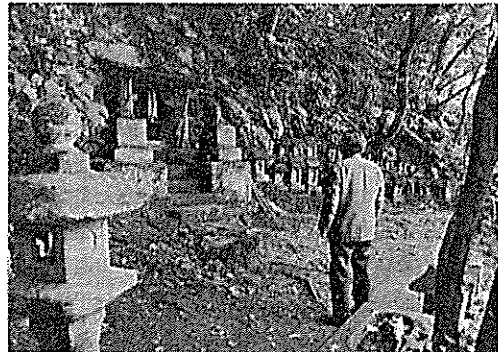
さて、話を元に戻しこうして何の罪とがない然も愛情深い哺乳動物の解体という地獄絵を演出するのは出刃組だけであり、元締も船元も関係がないのである。

従って鯨霊の冥福を祈り供養を考える立場におかれるのは出刃組だけで彼等こそ鯨墓の謎をとき得る唯一のグループに違いない。

こう気がついて一山こして彼等の部落へ足をむけたのである。幸に出刃組の長をしていた高梨家はすぐにわかり事情を話すと、鯨の墓は家の裏山の弁天様の境内に何十基とありますよ。というのである。

最後の出刃組長故源之助さん(安政元年生)の孫に当たる昇氏(昭9生)が案内してくれ、夏草の中をかき分け乍ら弁財天の古い石段を登った。小祠の割には立派な石段であり、鳥井も約束通り立っていて境内も広く、かつては、相当な格式であったろう。

成程聞けば此の地は旧領主酒井家の所有地であり領主の財福神として領民共が祈念する數祠ではないようだ。この境内に大小52基の小碑がならび(3基の新碑を除く)主碑は三基で山の中腹に掘られた洞窟の中に



主碑は左上の洞くつに三基あり、中央碑の側面に醍醐新兵衛の陰刻がある。

おさめられている。前面は神社様式の門扉と向拝で仕上げられ両側には立派な三段づみの石台の上に唐獅子がおかれている。鳥井口の石燈楼といい貧しい庶民の財力では一寸考えられない構成である。

中央の主碑の側面に天保 9 年 9 月願主醍醐新兵衛と陰刻され此の碑の裏付けとなっている。

この弁財天の管理や祭祀は今では高梨家を中心に附近の住民によって細々と受けつがれているが江戸時代

は醍醐組が管理し出刃組が直接の供養を行っていたのであろう。両家が退転した明治以降はすっかり忘れられ高梨家が一切を受け持ち今に到っているのである。

その間つまり明治以降は普通の弁天様同様な地元の俗信の対象として時に盛衰があったと伝えられ、それらしき雑碑の幾つかが混在している。

(本稿の史論はくろしお文化七号にくわしい)

チャールズ・スキャモン

— 博物学者になったクジラ捕り —

G. ケネス マロリー Jr. 著

北海道大学水産学部 河村 章 人 (訳)

“もう大分古いことなので私の記憶もいささかぼんやりしておりますが、あの長雨つづきの頃のこと私の乗っていたボートでおこったことでもお話しましょうか。当時、私は仔連れクジラを追っかけていましたが、ボートの舵とりには、気をつけろ、仔奴には近づくんじゃないぞ、と命令しておりました。というのも、若しもボートがひと触れでもするとクジラがたちどころに我々をボート共々粉々にたたきつぶしそうな様子だったからなのです。ところがそう言う間もなく 1、2 番話が仔クジラにつき立てられ、ロープはずかさずボートのショック（綱掛け）にとられたのです。当の仔クジラはというと、あっという間に頭から血を吹き出し、舵とりは‘船長、殺りましたぜ。オッカサン奴がうしろを追っかけて来てまさあ’とがなっております。さて、私はこれをきき、乗組たちの生命にもかかわるので直ちに岸辺へボートを寄せるよう命令しました。ボートが海岸にのし上げるや私たちはばらばらと一目散で逃げたものです。私はわき目もふらずに逃げましたが、とうとう全員木に登れと叫んだときにも舵とりがどなっております。‘船長、あのオッカサン奴、まだ追っかけてきてますぜ。’”

クジラというものが正しい知識と神話とが入り混ってまだ全体としてわけの分らない存在であった時代には、先の逸話の作者でもあるチャールズ・メルヴィル・スキャモンの名がしばしば登場する。また、モラト

リアムということがクジラの将来を思えばかる人々の標語であり論議の中心的課題であった頃、スキャモンはいわば悪の筆頭のような存在でもあった。

1851年から1862年にかけてチャールズ・スキャモンはクジラ捕りでなりわいを立てていた。とはいえ、彼はただのクジラ捕りや船長ではなかった。スキャモンは実に卓抜なクジラ捕りであったし、やることなすことすべてがうまくいったのでバハカリフォルニアの礁湖のひとつには、そこが絶滅しかかったカリフォルニアコククジラのたまり場のひとつでもあったのだが、彼にちなんだ地名が冠せられているくらいである。

1858年、スキャモンはバハ地域の貿易業者達の助言をききいれて低潮時には4～5メートル位しかない浅瀬を通ってみた。そこで彼のみたものは一名“石あたま”とか“貝掘り野郎”“デヴィルフィッシュ”“グレイバック”“ズタぶくろ”などとよばれたカリフォルニアコククジラ (*Eschrichtius robustus*) の一大繁殖場——正に別天地そのものであった。コククジラは年々余りにきまりきった洄遊パターンをとるので捕獲によってもまた一番傷つけられやすい存在である。このスキャモン礁湖やその周辺ではその後11年間にわたって激烈な捕鯨が行なわれたために、始めは15,000～30,000頭もいたのが、しまいにはわずか4,000頭ばかりをのこすだけとなってしまった。

スキャモンについてこのことだけが記憶にとどまる

ならば、彼は正しく^{おほ}惠の筆頭みたいなものにちがいない。しかしながらスキヤモンの輝かしい履歴を通じて考えると、今日私たちが持合せている太平洋沿岸の鯨類や海産哺乳類に関する知識のうち大きな基礎をつくり出したという今ひとつのスキヤモンのタレント性を見逃すわけにはゆかない。実に有能な著者としてスキヤモンは自分で描いたクジラや風景のスケッチをうまく一文にとりまとめ、1874年、あのユニークな一冊、“北米北西沿岸の海産哺乳類”を生み出すのである。

スキヤモンのこの業績と先見の明についてよく味わってみるには、いくつかの鯨種が多分に絶滅にひんしていることに対する今日の認識について思いをめぐらせる必要がある。スキヤモンの時代は所謂カリフォルニアのゴールドラッシュの時期であり、ナンタケットやその他ニューイングランド地方の町々から出漁するアメリカ式捕鯨によるマッコウ漁の最盛期でもあった。更に一方では南北戦争もあれば、米国税関監視局（今日の沿岸警備隊）の設立、ロシアからアラスカの買収などあれこれ出来事の多い時代でもあった。政府資金による動物、自然保護活動は未だその揺籃期にあり、ウィリアム・ホーナディなどが“野性動物のための30年戦争”を書いて無節操なクジラ殺しにあいそをつかしたりしたのもこの頃であり、結局1938年になるまで保護規制はとり立てていうほどのことは何等講じられなかった。ようやくセミクジラとコククジラがその対象となったのはそれからややあって後のことである。

スキヤモンは1825年、メイン州ビツトンで生まれている。当時、船乗りになるというのはそれだけでこの上ない冒険であったし、ましてあの巨大な獣と対決するなどということは正しく男の肝だめしそのものであった。スキヤモンは“モビディック”（1851年刊）をものにしたハーマン・メルヴィルとは同時代に生きたわけで、“モビ・ディック”からスキヤモンが捕鯨の航海で出しわたしたであろう様々の情景を伺い知ることができる。

スキヤモンの船隊は35人乗りの本船に、6人漕ぎで艇長9.3メートル、巾1.8メートルの捕鯨ボート4隻からなっていた。しかしながら、当時とはいえ捕鯨鯨の技術は改良され始めており、爆薬入りの手投げ銃、ポンプランス、捕鯨ボートのへさきにとりつけた銃架から射出する銃銃などが捕鯨兵器の一部となっていた。とはいえ、追尾などは全く従来通りのやり方を踏襲していた。

チャールズ・スキヤモンの父はビツトンで人望厚

い行政官であった。けれども、息子を上級専校へやらせたいとの父の願いは、スキヤモンがメイン州、ニューキャッスルのマレー船長の下で見習水夫となるに及んで見事にうち砕かれてしまった。23才になった時、スキヤモンはコロライナと交易をしていた沿岸航路のスクナー“フェニックス号”の船長をやることになる。彼は船長になって仲々手堅く仕事をやり、この同じ年に結婚した。そして以後46年間、この職を辞めるまで船長としての生活をつづけることになる。

スキヤモンが船長になって始めての大きな、そして運命的ともいえる出来事は1850年、黄金熱にうかされた人々をカリフォルニアに運ぶためパーク船“サラモア号”の指揮をとったことにはじまる。船がひとたびサンフランシスコに入港するやスキヤモンはこの地をその後の生活の本拠とぎめたのである。

1851年には捕鯨の第一船がサンフランシスコを後にし、明けて1852年夏には新たにやってきた船長がゾウアザランの油を求めて事業を開始した。この後の数年間にスキヤモンは知己を得た身辺の船長たちからゴンドウやマッコウ、ザトウ、セミなど太平洋の鯨類について知るようになる。

船用品商のタプス商会がかかわるある協会はスキヤモンの名が後に地図にのるような状況をつくり出した。そのなれそめは支那に行く航海で、1854年に戻ってくるものだった。次いで1856年、スキヤモンはまだだれも入ったことのないスキヤモン礁湖の南方、マグダレナ湾に捕鯨航海を行なった。この南方への航海でスキヤモンはコククジラ捕鯨を難行苦行のうちに経験した。

何がいったい自分の名を付した礁湖にスキヤモンをして導いたのかは今ひとつ明らかでないが、多分に様々のはなしとかうわさを併せ考えたであろうことやバハカリフォルニアで交易をするメキシコ人、スペイン人たちからかき集めた見聞をつなぎ合せた所産のようだ。クジラどもがこの海域にしょっ中現われるということはこの地方のインディアンたちがクジラの臆でつくったスカートをはいているとか、若者たちは弓の弦に同じものを使っているとかいう伝説にヒントを得たらしい。こうした雑多のはなしがバハ地方で資源の開発を狙う一発屋たちの耳に入るやそれがまた誇大されていった。かかる一発屋や探検家の中にはマッコウ捕りや、多分にメキシコ本土に話をひろめたグアノの採掘屋たちが含まれていた。そして1856年になってスキヤモンがマグダレナ湾の捕鯨の往き復りに通りかかった際、こうした連中から例の情報も彼の耳にもとどく

ことになる。

1857年の夏と1858年の冬の2回、スキヤモンはある特定の場所を探し求めることになるのだが、何が或いは誰が彼をしてそう確信を抱かせるようになったのかは定かでない。ただこういうことだけはわかっている。すなわち、スキヤモン礁湖と他のふたつの小さな入江をかこい込むように存在するセバスチャン・ヴィステイノ湾というのは元々ブリッグ船“ポストン号”の目的地ではなかったということである。スキヤモンがもひとつ思わしくない漁況から少しでも足しにと考え、冬になってもそこに居すわることになったのはその夏の捕鯨とアザラン猟に殆ど失敗していたことによる。そんなことで彼はもう少し南につつ込でみようと思ひ、小型のスクナー“マリン号”を偵察に出す。ところがこの“マリン号”がえらい情報を持ち帰ったのである。つまり、彼等の行手には礁湖が三つばかりあり、その中のひとつには“ポストン号”でも通れそうな水路が通じていて、どの礁湖にもクジラどもがうじゃうじゃいる、というのである。

事実からすると、他の鯨捕り達もそこには豊富なクジラがいることを知っていたらしいが、ただはなしを聞き流すだけで誰も実行するものがいなかったのである。というのも、そこは潮汐とそれにつれておこる潮流が気狂いじみていたからだった。小型の“マリン号”は問題なかった。たがスキヤモンの乗った“ポストン号”が入江の浅瀬にさしかかったとき突然風が死んでしまった。風はそよとも吹かず、鯨捕りたちは礁湖のどこか安全なところまで行くことができず、さりとて元に戻るにもすでに風は落ちすぎていた。錨を投げては岸辺に近づくとしたが、船はいたずらに波間を上下するばかりである。生きた心地もないまま夜が明けたが、朝になっても気まぐれな風はひとなぶりするとまた凩いでしまう。“ポストン号”は意地悪い自然の前にただもて遊ばれるばかりであったが、その日も遅くなってからようやく安全地帯まで抜け出す風にめぐまれた。

スキヤモン礁湖(スペインの地図にはラグナ・オーホ・デ・リーブレとある)のある場所は実際には三つの入江が横に並んでいる。今ひとつの礁湖、マヌエラとブラックウォリヤー(黒い戦士)とはこの浅瀬をのり切ろうと試みた船の名にちなんだものである。この意味ではスキヤモンの名だけが成功を祝福された唯一のものとしてのこっている。

浅瀬という船にとってはおそろしい障害をのり越えたことが、とりもなおさず南北戦争の時代でもある

1860年代始め頃までつづいた捕鯨の当り年を招来することになるのだが、一方ではかねて予測されていたようにこれがクジラ資源を商業的にはダメなまでつぶすことにもなるのである。幸いなことに、クジラは経済的にはマッコウやザトウ、セミなどに比べて価値が低いということがあった。でなければ、クジラはとうの昔に生物学的にいう絶滅に瀕していたにちがいない。今日、クジラの回復をみるにつけ、1938年に端を発するクジラ捕獲禁止にはじまるひろく鯨類を保護しようという運動の中ではまれにみる成功の一例ということが出来る。ちなみに、現在、クジラ資源は11,000頭に近いと考えられている。

南北戦争につづく数年の間、資源開発にとりつかれたスキヤモン船長は他の捕鯨船長たちもひきつれて二度ばかりこの礁湖を訪れている。ところが余り沢山の鯨捕りたちがやって来たので、発見から3度目の冬にはスキヤモン自身はこの礁湖を避け、始めてパレアナス湾とサンイグナチオ礁湖にふみ込むこととなる。

スキヤモンはその生涯を通じて専らクジラを捕るというクジラ捕りとしては稀らしい存在であった。他のクジラ捕りたちが北極で索餌洄游中のセミヤホッククジラを追いクジラなどはほんの時たま捕ったのに対して、スキヤモン船長は一日でも早く船の油槽を満タンにするということの価値については熟知していた。ニュー・ベッドフォードから出る捕鯨船は典型的な場合約4年の航海で満タンにしたが、これに対してスキヤモンは8ヶ月でやってのけた。数あるスキヤモンの航海の中、二度ばかりは8ヶ月の航海で36,000ドルをかせいだ。当時としては決して悪くない商賈であった。

こうした結果スキヤモンの名はクジラと切っても切れないものとなった。西アラスカにも夏季クジラが索餌洄游してゆく最北限近くにスキヤモンの名を冠した湾がある。さらに、博物学者のW. H. ダールはスキヤモンに敬意を表してクジラに寄生する端脚類のクジラジラミの一種に *Cyamus scammoni* と命名している。

スキヤモンは南北戦争がまさに始まろうとする頃、米国税関監視局に徴募し、その時点で彼の捕鯨活動に終止符を打つ。この新しい職場でもスキヤモンは船長に任命され、乗艦“シュブリック号”をもってサンフランシスコ沿岸のパトロールに従事する。この出来事とそれから以降のスキヤモンの生活パターンを形づくることになった今ひとつの出来事は、1865年ウエスタン・ユニオン電信会社の遠征隊に参加を指名された

ことである。この遠征の目的はブリティッシュ・コロニア、ロシアアメリカ（今のアラスカ）とシベリア間に海底電信回線を敷設してアメリカとヨーロッパをセント・ピーターズブルグ経由で結ぼうとするものであった。その頃大西洋側ではアメリカとアイルランドを結ぶ同様の計画は再三失敗をくり返していた。

スキヤモンが筆をとるようになったそもその原因といえば、この電信回線敷設に参加していたスミソニアン研究所とシカゴ学術協会の面々の存在とスキヤモン自身の生きた社会、友人関係などであろう。そしてその結果生まれるのが彼の主要な著書、「北アメリカ北西沿岸の海産哺乳類」なのである。

太平洋回線の敷設は成功裡に終り、大西洋側も程なく開通した。それにもかかわらずアラスカとシベリアをアメリカ人科学者で探検開発しようとするのは、アメリカがアラスカを買いとるべきことをいよいよ明確にした。アラスカ買収総額 720 万ドル、1867年3月30日のことである。

1869年にウェスターン電信探検が終了するに及んでスキヤモンはいよいよ著書の執筆に入る。そして、これに次ぐ6ヶ年間に彼は本を書くための研究に費した。ローワーカリフォルニアの海岸をとりまくマダラナ湾の調査（1867年）でスキヤモンは自分の絵と原稿を出版の為最終的に仕上げることができた。彼の出版第一号は「我が西岸の鯨類について」（On the cetaceans of the west coast）で、スミソニアン研究所のエドワード・コープが編集する「フィラデルフィア自然科学会報（Proceedings of Natural Science of Philadelphia）」に発表された。その後間もなくスキヤモンは「月刊オーバーランド誌」（Overland monthly）の寄稿者となった。この雑誌はブレット・ハルトとマーク・トウエンが編集、装ていをするもので、当時の社会ではいわば今日の「New Yorker」誌にも相当する存在のものであった。彼がこの雑誌に投稿した17篇の中、数篇が例の「海産哺乳類」の何章かを形成する土台となっている。

そうこうするうちにもスキヤモンは次第に名士としても名を連ねるようになり、彼の本も体をなすにしたがって自然科学界の諸権威、特にルイ・アガッソや軟体動物のウィリアム・H. ダルなどスター的存在の人々からも注目をあびるようになった。ルイ・アガッソなどは心から原稿を賞めたたえた。スキヤモンはこうした新しい自分の科学界での立場が形をなしてくる中で、今度はそれまで時折海洋生物について講演もして来たことのあるカリフォルニア自然科学協会に会

員として迎へ入れられた。

船乗り生活が元で余り健康はすぐれなかったため、スキヤモンは本の出版をあと数年延ばさざるを得なくなった。その上、彼はまだ米国税関監視局にも籍をおいていたので、こちらの仕事と書くことのふたつを両立させなければならなかった。だがとうとう1874年7月、資金面では厳しい制約をうけながらも例の「海産哺乳類」が発刊された。

当時、この本の出版については新刊レビューで、以下のように記されている。「スキヤモンは彼の科学的知識を単につなぎ合せただけの博物家にしかすぎず、鯨捕りとしての経験からすれば、あの深海の怪物の習性についてはもっと然るべき解説があってもよいはずだ」

スキヤモンのこの太平洋沿岸海産海洋哺乳動物（アザラン類、セイウチ、イルカ類、その他を含む）の動物学に対する業績は全くユニークなものである。当時、スコアスピーの手になる「北大西洋の鯨類」やスキヤモンに遅れること4年のスターバック著「アメリカ捕鯨史」などがあったが、スキヤモンの本は一個人の観察をひとつひとつ拾い集めた鯨類に関する科学的情報の集成として得がたいものである。それ以降彼の観察結果は色々多くの修正を受けてはきたが、今日の知識がよって立つものの根幹として原著は今なお鑑と存在している。スキヤモンの著書の展開は野望に富んでおり、書中彼の友人でもあるスミソニアン研究所のW. H. ダールによる正確かつ系統立った北太平洋産鯨類目録をも所収している。用いた挿画には細心の気の配りがあり、出版社の手助けもあって芸術的に仕上がっている。記述はもちろんスキヤモン自身能うかぎりの正確を期している。鯨捕りたちが使った種々の道具類も注意深く記載されているし、著書の後半には年代記風に統計を使ったアメリカ式捕鯨史をそえている。

また、この本ではスキヤモンの捕鯨に対する反対の感情を表わす記述もみえる。コクシラを扱った部分の要約中でスキヤモンは以前「月刊オーバーランド誌」で書いたアザラン類についての観察も繰返しのべている。

「当今の鯨捕りたちはくる年もくる年もずっと沖合に鯨を追い求め、危険な沿岸地帯を避ける傾向にある。そして、我々がこれまでに記述しようと無中になってやってきたこのコクシラという種類ほど定常的かつ多面的に追い求められたものは他にいないのである。さらに、この動物が一度は相集る大きな湾とか礁湖などは、そこでかれらが仔を産み育てるゆりかごの

ような存在なのだが、これらとて今ではすっかり荒れ果ててしまった。カリフォルニアコクジラの巨大な骨格があの銀色に輝く岸辺に野ざらしとなり、シベリアからカリフォルニア湾にわたる海岸線のいたるところに散らばっている。このところ長らくこの動物も太平洋から絶滅した種の仲間に加わることにならないかどうか疑問のもたれ続けてきた由故である。”

こうしたスキヤモンの姿勢と同時に、あふれるばかりの冒険譚と捕鯨にまつわる伝承なども盛り込まれている。スキヤモンはコクジラ捕りとして最もよく知られているが、あらゆる報告書類から推すかぎり、礁湖で鯨を追いつめ捕獲するやり方というのは正しく冒険的仕事そのものである。スキヤモンはこの鯨という賞品の獲得をめぐる二隻のライバル船についても記している。“二隻の捕鯨船から放たれた何隻かのボートが、それらは鯨にピッタリとついてたのだが、私たちの船のすぐそばを通りすぎた。ところが、それぞれのボートの士官連中はお互いに共闘してやる気など毛頭なかったし、二頭の鯨も別段離れ離れに散るということもしなかった。かれらが疾走し接近した時、私たちは大きな叫び声を耳にし、次いで荒々しい身ぶりをしているのが目にとまった。そのあとすぐに帽子も冠らない 6 フィートはあろうかとみえる一人の屈強な男が長髪をなびかせて反対側に向かってどなるのがきこえてきた。“やめろ、やめろ、そっちの綱を切れ、おれがはじめにやったんだ！ そいつを切れったら切るんだ！ でなきあ貴様もいっしょにやっちゃませ！ おい、切らねエのか、爆薬鎧をぶち込むぞ！” だが当の相手ボートの士官はいたって冷静に応えた。“射てるものなら射ってみろ、このおいはれのボケナス野

郎！ こっちもこいつを丸ごとせしめるまでは綱を切るってわけにはいかないぜ”それから乗組員の方は向き直って“そら野郎ども、綱をひけ”前進するんだ！ あの野郎に一ぱつ御見舞いだ！ そらもうちよい前進だ、野郎にひと泡ふかせてやるのだ！”その時分二頭の鯨はすでに離れ離れになり、ボートも遠ざかって何も聴えなくなっていた。しかし二頭共すでに血潮を吹き上げており、ややあつてのちあぶくが盛上って断末魔を迎えたようだった。

最後にスキヤモンの著書中、ザトウクジラについて以下のような記述があることも見すごすわけにはゆかない。“繁殖期になるとザトウクジラは恋の道化に明けくれることで知られている。こういう時期のかれらの愛撫行動は何よりも驚きであり、珍奇なものでさへある。この一連の行為はカジキマグロやオナガザメが鯨を攻撃するといった伝説的なはなしを生むものにもなっているのは疑いのないところである。二頭のザトウクジラが互によりそってじっとしているとき、しばしば長い手羽を使って交互に噴気を出すようにしたりする。これは愛撫のひとつであるらしく、穏やかな日には軽くたたき合う音が数マイルの先まで聴えることさへある。またかれらは長い手羽で互に撫で合っては寝返りを打ったり、はてはふざけてはね回ったりとかするが、こうしたことは下手に書くより読者諸賢の想像におまかせするのが何よりというものである。

出典：G. Kenneth Mallory Jr.

Charles Scammon. Whaler Turned Naturalist. *Oceans*, 10(4) : 40—44, 1977.

あ し た せ

アメリカ東海岸のマサチューセッツ州にニュー・ベッドフォードという町がある。ここはヤンキー捕鯨華やかなりし頃の最大の捕鯨基地であつて、今日では有名な捕鯨博物館があつて、ここに多くの資料が保管されている。昨年11月19日のことであつた。ここの館長のタグラーさんが、ひょっこり鯨研を尋ねて来た。外に用事があつて日本に来たからちよつと顔を見たくなつたという程度のものであつた。

この時彼はお土産だと言つて1冊の本を置いて行った。この本は「西北極海における汽船捕鯨業」と題して、彼の博物館から1977年に刊行されたものである。

127 ページの美しい本で、当時の捕鯨船や漁具などの写真が多数収録されている。

ここに言う汽船捕鯨業とは補助機関付帆船のことである。本書によれば、このような捕鯨船が操業したのは1880年から1910年までの30年である。操業した場所は、ベーリング海峡を越してアメリカ沿岸の北極海である。捕った鯨はボウヘッド（グリーンランド鯨又は北極鯨）である。ボウヘッドとは頭が弓なりに曲がっているから名付けられたもので、直訳すれば弓頭である。

ベーリング海峡や北極海でボウヘッドを捕り始めた

最初の年は、これよりずっと前の1848年である。当時はボウヘッドが豊富であったから、ここの捕鯨は大いに栄えた。しかしながら 良き時代は長く続かなかった。石油の発見や植物油に押されて鯨油の価格は暴落した。これに加えて南北戦争のあおりをくって21隻の捕鯨船が焼かれた。さらに鯨資源の減少のため、捕鯨船は北極海の奥で操業を余儀なくされ、氷による遭難が続出した。

ボウヘッド1頭当りの生産価額は1865年には7,100ドルであったものが1875年にはほぼその半額の3,700ドルであったという。操業の安全を図るためには補助機関をつけなければならないが、それは莫大な経費増を意味する。ところがここに救いの神が現われたのであった。その救いの神とは、この本によれば、第1が鯨ヒゲの価格の上昇である。その理由はコルセットの蕊とスカートのフープの需要増大だという。つまり御婦人のファッションである。このファッションのために、セミ鯨とボウヘッドが狙われたわけである。第2の問題はアメリカ大陸横断鉄道の開通である。この鉄道が完通したのは1869年であるが、これによって経費の節減が可能となったのである。鯨油にしても鯨ヒゲにしても、その2次加工業は東部に集中していたため、それまでは捕鯨船が自ら運搬船として、地球を大廻りして運ばなければならなかったのである。

アメリカの最初の補助機関付帆船の捕鯨船が建造されたのは1879年のことで、その名はMary and Helen号であった。同船はその処女航海でボウヘッド27頭を捕獲し、その生産金額は10万ドル以上に達したとい

う。このようにして補助機関付帆船捕鯨業が興り、それが約30年間北極海で行なわれたのである。1910年とは明治43年であり、日本ではもうノルウェイ式捕鯨が始まっていた。この時代にアメリカでは、補助機関がついてるとはいえ、帆船で捕鯨が行なわれていたのである。しかもその捕り方は、手投げ銃にポンプランス併用の投げ鉄砲(ダーティング、ガン)や肩打銃から発射するポンプランスであった。

今日ではこのような帆船はなくなってしまったが、この鯨のとり方そのものは、そのままエスキモーに引き継がれている。昨年12月のIWCの会議でエスキモーの捕鯨は引き続いて認められることとなったが、その理由の一に文化という言葉がある。文化とはなかなか難かしい言葉である。ある人は今日の捕鯨には、文明はあるけれども文化はないという。エスキモーの捕鯨は、文明はないけれども文化があるということであろう。江戸時代の日本の捕鯨もそうであろう。

なほこの本には当時の銃やポンプランスのメーカーの製品目録がついているが、それによると、ポンプランス銃35ドル、金属の羽根付ポンプランス1.75ドル、ゴムの羽根付ポンプランス同じく1.75ドル、ダーティング、カン用ポンプランス(羽根なし)1.60ドル、ダーティング、ガン16ドル、ダーティグ、ガン用銃130セントとなっている。何れも一挺又は1個の価格である。これに対して製品の価格は、鯨油1ガロン当たり65¼セント—1.45ドル、鯨ヒゲ1ポンド当たり1.12¾ドル—1.71ドルである(大村)。

ぶ つ く す

- 1) Geraci, J.R. and D.J.St. Aubin. 1977. Mass stranding of the long-finned pilot whale, *Globicephala melaleuca*, on Sable Island, Nova Scotia. *J. Fish. Res. Board Can.*, 34(11):2196-2199.
- 2) van Bree, P.J.H., D.E. Sergeant and W. Hoek. 1977. A harbour porpoise, *Phocoena phocoena* (Linnaeus, 1758), from the Mackenzie River delta, Northwest Territories, Canada (Notes on Cetacea, Delphinoidea VIII). *Beaufortia*, 26(333):99-105.

訂正：第312号(1月号)のページ数51～58は1～8と訂正します。